広島芸術学会芸術展「極小と極大展」まとめ

実行委員会委員長
入野　忠芳

96年の第一回芸術展に続いて昨98年九月に第二回展を開催した。学会十年にして初めての作家の活動であった一回展が終るやいなや多数の出品者から次回を待ち望む声が寄せられていたから、実行委員会をいくらか長期的展望を視野に入れたものに再編成して検討を重ね、とりあえず三回展まで隔年開催することとした。

三回くらい継続すれば芸術学会の展覧会としてのイメージが定まるだろうとしてのことで、その先はその時点で考えることとしている。というのも、前回でも書いたように個別の動機で集っている多様な個性の作家メンバーを何らかの共通項でくくることには無理があって、可能なのは同一のテーマに取りくんでいる作家個々を同一の場においてみるということである。テーマ次第の展覧会だということであり、長期的展望とはいっても遠くの先まで見通してかかることがむつかしいのである。

三回を具体的にいえば、時間軸をテーマとした第一回の「10年の軌跡」に続いて、第二回は空間軸「極小と極大」、そして第三回は歴史軸「ヒロシマをみる」、ここまでを考えている。三回展については、予定どうりでいくと西暦２０００年開催となるわけで、広島に住む芸術家があらためて「ヒロシマ」に取り組んでみるこの上ないチャンスであろうという判断によっている。

今回のテーマ「極小と極大」は、単純に作品寸法の大小を問題とした。極大作品一点と極小作品一点とを並列して、極小あっての極大、極大あっての極小という比較空間学（?）とでもいうべき展示効果を目論んで会報45号で次のように呼びかけた。

『美術館に発表する私たちの作品は概ね「極大」に近いものが多いのですが、展示空間の大きさとか、他人の作品への意識とか、あるいは作品思想自体が要求する大きさとか、さまざまな要因が考えられます。それはそれとして他方では焼きもの世界の茶碗のような「手

のひらサイズ」の存在もあなどれないものがあると思います。手のひらと言えば、孫悟空が縦横に飛び回った釈迦の手のひらを思うこともできますし、手相学の宇宙の図を想起することもできるでしょう。小さくとも「極大」にも匹敵しうる「極小」。極大とは人の体の遠心的な最大寸法で、極小とは人の心の求心的な凝縮の寸法といえるだろうかなどと考えもしますが、意義付けは各自でやっていただければいいことです。』

たちまち多くの参加意欲が伝わってきたが、極小と極大の解釈については少なからず混乱が生じているようにもみえたので次の会報でもさらに念を押した。

『極小といい極大といい、ことさら極端な作品を用意していただく必要はありません。「大きいことはいいことだ」といわれた高度経済成長の頃からでしょうか、美術館で発表される作品は大きさを競うような傾向にあって今日まで来ておりますが、作り手の感覚でいえば、前回展の作品もそれぞれにおよそ極大だったと考えられるのではないでしょうか。対して極小とは、手のひらにのせてみることができるほどの大きさと考えてください。大小の落差が大きいほど興味深いという企画ではありますが、さりとて米粒に文字を書くなどのような「芸」を考えるものではありません。小さかろうとも大作に匹敵しうる「珠玉の小粒」をご用意ください。』と。

作品はいずれも気を入れた力作がそろったしテーマの解釈も概ねのところでは順当だったが、しかし全てが充分にテーマを満たしていたとも言い切れないかもしれない。例えば大きな立体作品と小さな平面作品、あるいは大きな油彩画と小さな素描画などにおいては比較の面白さを問うにはいささかの無理があったかもしれない。さらにまた、印刷デザインや写真のように機械操作で大小自在に調整できるものではこのテーマは取り組むすべがなかったかもしれない。後者については有りうることだと予測していなかったわけではないままに出品者に問題を預けてしまった。

いずれにしても、テーマを満たすにとどまらずいかに興味深く取り組んでいかに面白く見せるかと言う課題は残っているといえる。この点については早くも次回への心配がある。ヒロシマという困難なテーマに対して、これまでのように出来合いの作品で応えることができるのは平素からヒロシマをテーマとしている一部の人に限られるだろうから、多くはそのための新作が求められるかもしれない。

とはいえ今回展での観客の反応が、個々の作品についてよりもテーマの意外さや面白さをいうものが多かったのは、見せ方を問う展覧会としては好ましい反響であったといえるのではあるまいか。

展示会については会場設計を学芸員の松田弘委員に一任して、出品者はそれに基いて会場づくりを行い、かつまた会場の受付も前回と同様に分担してなんとかこなした。

ここで、前回と同様に会期中に開催したシンポジウムにふれておきます。テーマは展覧会に合わせて「極小と極大・作家が語る—制作の現場」とした。パネリストは彫刻の高木茂登、工芸の村中保彦、美学の金田晉、そして司会を画家の入野忠芳がつとめた。

先ずは会場の出品作家一人ひとりから、今回のテーマをどのように解釈してどういう取り組みをしたのかを順番に語ってもらってみると、誰もが制限時間をこえてより多くを語りたがるという司会者泣かせの意欲を示した。このことに関しては、これまでもシンポジウムのパネリストで登場する作家の多くが事前には人の前で喋ることへの戸惑いを言いつつも、その時になれば雄弁とはいかなくても熱心に誠実に語って聴衆からの評判もすこぶるいい。作家も意外によく語るし、しかもなかなかの集客力もあることを付け加えておきたい。

さて今回は作品の大きさがテーマであった。近年は美術館が大型化してきたことや昔に比べれば作品材料が安価で豊富になっていること、さらには運搬手段も容易になっていることなどが裏付けとなって作品が大型化しているが、弱肉強食の動物界においては視覚的に大きいものが価値が高いという法則から我々もまぬがれてはいないということであろう、とくに公募展などでは大きさを競う傾向にあって久しい。しかし他方では作家はさまざまな大きさの作品を制作している。大作の残り材料で小品の大きさが決まるということも少なくはない。作品の大きさはどういうやり方で決まるのか。

極大の限界点を考えると先ずは身体の寸法が関係してくるはずだし、技法や作業場の大きさや保管する空間、さらには材料費、ことにも立体作品であれば運搬費用も切実に関わってくる。作家にしか分からないかもしれない生な現場を語りあった。ときに作家がいかに高邁なことを思い語ろうとも、作家にとって最も大事な現場は手に触れる素材の実感であろう。その意味でサブタイトルに「制作の現場」をうたっている。唯一の学者パネリストの金田晉が、学問世界で作品の大きさを言うとき常に形而上学的な側面から論じられてきたことからすれば斬新なテーマだと語ったのは、作家の現場と批評との接点について考えさせるものでもあった。

また、いよいよ巨大化する作品ということで屋外彫刻の現状にふれるなかで、環境造形や都市設計といったところまで話が展開していったのも、立体作家二人をまじえたシンポジウムであってみれば当然の成り行きであった。

最後に今回の実行委員を記しておきます。大井健地、大橋啓一、奥田秀樹、宍戸清子、高木茂登、田谷行平、松田弘、吉井章、そして入野忠芳でした。なお、展覧会はエネルギア文化財団の助成を受けました。

（いりの・ただよし　画家）